（別添）

令和５年度「ちばっ子の学び変革」推進事業（検証協力校）研究状況報告書

神崎町立神崎小学校

１　学校紹介

本校は今年度創立１５０周年を迎え、香取郡市の中でも伝統ある小学校である。自然豊かな環境にあり、町全体として「発酵」をテーマに町おこしをしていることもあり、町行政・地域の積極的な協力を得ながら、生活科や総合的な学習の時間などを中心に、地域の特色を生かした学習カリキュラムが組まれている。

学校の教育目標を「自ら学び、心豊かでたくましく生きる児童の育成」とし、「勤勉・親切・正直・勇気」の４つの徳を校訓としている。

２　研究主題

自分の考えをもち、主体的に伝え合う児童の育成　～言語能力の向上に焦点を当てて～

３　研究の概要

（１）児童の実態と課題

今年度の全国学力・学習状況調査の国語の正答率は、全国や県平均よりもやや上回っていた。「知識及び技能」では、言葉の特徴や使い方に関する事項の正答率が高く、漢字を正しく読んだり書いたりする力や敬語を正しく使う力が身に付いていることが分かった。また、「思考力、判断力、表現力等」では、話すこと・聞くことの正答率が全国や県平均をはるかに上回る結果となった。これは、昨年度まで特別活動での話合い活動を研究していく中で、話し手が伝えたいことを捉えることや考えを比較しながら聞くこと、相手の考えを受けて自分の考えを伝えることを児童に意識させながら、指導してきた成果だと考えられる。

一方で、「知識及び技能」では、情報の扱い方に関する事項、「思考力、判断力、表現力等」では、書くこと、読むことの項目で、全国、千葉県の正答率を下回った。その中でも、記述式の正答率が特に低かった要因として、①条件を正しく理解できなかったこと、②与えられた条件を全て満たす記述ができなかったことが考えられる。今回の設問では、条件が箇条書きで３つ提示されていた。しかし、１つの条件の中に「グラフとカードの両方から分かることを書く」ように提示されていたため、実際は条件が４つとなる。児童の解答類型を見ると、グラフとカードのいずれか一方のことしか書いていない児童が全体の３分の１程度、３つの条件のうち２つしか満たしていなかった児童が全体の５分の１程度いた。つまり、文章の内容を読み取ることはできているが、条件に沿って書くということに慣れていないことが大きな要因だと考えられる。また、情報の扱いに関する事項については、文章や図表などと結びつけながら情報を読み取ることに課題がある。特に、文章とそれに関連した絵がある問いでは、文章をもとにしながら絵と結び付けて読むのではなく、絵からの情報だけを頼りに答えを選んだと思われる児童が半数程度見られる。このことから、文章の内容を正しく理解し、それと関連した資料を選択する力を身に付けられるような指導が必要である。

学習状況調査では、児童の生活習慣や学習習慣、自己有用感、基本意識の項目で、全国平均値よりも高い結果となった。読書に関する意欲は全体的に高いものの、１日当たりの読書時間を見ると、１時間未満の児童が多い。さらに、教科に関する項目については、学習の必要性を感じてはいるが、学習に対する興味関心はあまり高まってはいない。また、授業でのＩＣＴ活用に関する項目についての評価も低いため、これらの項目を意識した授業改善を図っていく必要性がある。

（2）学力向上のための取組

児童の学力向上に向けて、教師に対する取組と児童に対する取組の両面から実践を行った。児童に対する取組については、課題である「読むこと」「書くこと」の力を高めるために、本校の強みである「話すこと・聞くこと」の力を生かした課題解決の方法を考え、以下の実践を行った。

＜教師に対する取組＞

○　全国学力・学習状況調査の結果分析の共有と課題解決に向けた手立ての検討

今年度の調査問題と結果を職員全体で共有した。実際に出題された問題を全体で確認したことで、問題の傾向をつかむことができた。また、児童の解答から誤答の傾向を教師が把握することで、「何ができるのか」「何をできるようにさせなければいけないのか」を明確に知ることができた。さらに、それらの結果をもとに、普段の授業をどのように組み立てていけばよいか、どのような手立てを講じていくとよいかなどについて、教師間で話し合った。話合いで出された課題解決に向けた手立ては、以下のとおりである。

【読むこと】
・資料から情報を読み取ることができるように、社会科の学習でも資料から分かることを考えさせたり、複数の資料を比較させたりしていく。
・文章の大事な部分を落とさず読むことができるように、文の構成を指導し、大事な部分に線を引いたり、丸で囲んだりしていく。
・文章の大意をとらえることができるように、要約する活動を取り入れる。

【書くこと】
・書き方の型を提示し、慣らしていくことで、書くことへの抵抗感を減らしていく。
・キーワードを提示し、それを書く活動を行うことで、条件を満たして書くことができるようにする。
・教師の採点基準を明確にし、部分点を設けない採点をすることで、条件の漏れ落ちなく書くことができるようにしていく。

○　教師の指導力アップのための相互授業参観

児童の学力向上のためには、まず教師の指導力を高めることが必要不可欠である。そのため、年間２回、相互授業参観週間を設け、さまざまな授業を参観することで、発問や板書の仕方、授業の組み立て方、活動内容の工夫などについて学ぶことができるようにした。相互授業参観後には振り返りの時間を設け、参観した授業から学んだことを伝え合ったり、普段の授業での悩みを改善する方法を話し合ったりした。意見を共有することによって、参観できなかった授業のことを知ることができたり、自分が気付かなかった点について新たに知ることができたりした。さらに、授業の悩みを話し合ったことで、多様な改善策を見つけることができ、実践に繋げることができた。また、これをきっかけに普段から授業について教師間で意見を交換する機会が増え、資料の共有などにも繋がった。

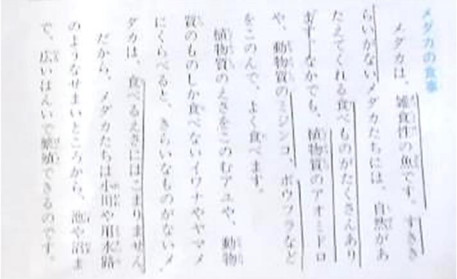
＜児童に対する取組＞

○　自分の考えをもち、主体的に伝え合うための手立て

書く力を身に付けるためには、①自分の考えをもつこと、②話すことを通して、自分の考えを

表現する力を身に付けることが大前提にあると考え、「自分の考えをもち、主体的に伝え合う児童の育成　～言語能力の向上に焦点を当てて～」というテーマで今年度研究に取り組んだ。２・４・６年生では、①②の両方を身に付けるために、自分の考えをもつ時間を確保し、それをもとにグループで話し合うことで、自分の考えを分かりやすく相手に伝えたり、より考えを深めたりすることができた（写真１）。３年生では、文章にサイドラインを引きながら読むことで要点をつかむことができるようにし、線を引いた部分をもとにしながら自分の言葉で要約できるようにスモールステップを踏みながら指導を行った（写真２）。１・５年生では、②の力を身に付けるために、ダブレット端末を活用し、自分が話しているところを録画し、振り返ることができるようにした（写真３）。また、録画したものを全体で共有できるようにしたことで、友達のよい話し方やよい言い回しを真似しようとする姿が見られた。

【写真１　考えを深めるために行った話合い活動】

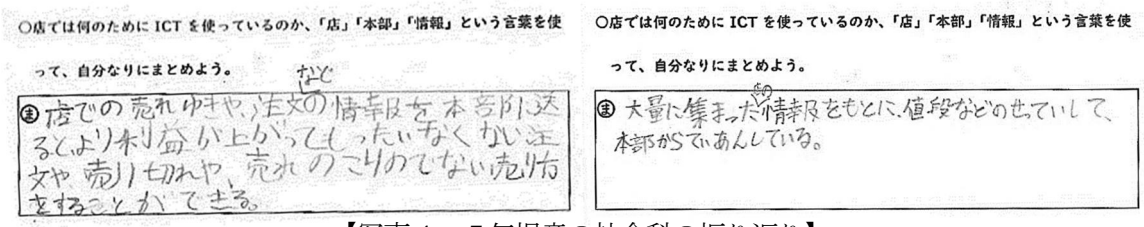


【写真２　サイドラインを引いた資料】

【写真３　ＩＣＴ機器を活用した話合いの様子】

○　自分の言葉でまとめや振り返りを書く

国語科以外の教科においても、自分の言葉でまとめや振り返りを書くようにした。最初は、何を書いたらよいか分からなかったり、自分の言葉で書いても何を伝えたいのかが分かりにくい文になってしまったりと、思うように書くことができない様子が見られた。そのため、まずは振り返りの観点を示した。「分かったこと」「大切だと思ったこと」「できるようになったこと」「次の学習で生かしたいと思ったこと」などを書くように指導したことで、視点が定まり、何を書いたらよいか分からないという児童が減った。また、文章を書く前に友達と話し合う活動を取り入れることで、自分の考えがまとまり言語化しやすくなったり、友達の考えを参考にして自分の考えをもつことができるようになったりもした。高学年では、必ず入れる言葉（キーワード）を提示したことで、学習問題と整合性がとれたまとめが書けるようになった（写真４）。



【写真４　５年児童の社会科の振り返り】

○　「言葉ブック」の活用

読む力、書く力を高めるためには、語彙を増やす必要がある。そのため、光村図書の「言葉の宝箱」を参考にし、６年間で身に付けたい「事物を表す言葉」「人柄を表す言葉」「心情を表す言葉」を掲載した用語集を作成し、一人一冊配付した。１年生では、気持ちを表す言葉が思いつかないときに使用したことで、思考の助けとなり、児童から「自分では思いつかなかった言葉がたくさん載っている」「言葉ブックがあったから自分の考えが書けた」という声が聞かれた（写真５）。２年生では、物語文の学習で登場人物の人柄を考える活動で使用し、自力ではどのように表現すればよいか分からなかった児童も、言葉ブックを見ることで内容に適した言葉を見つけることができた。３・４・６年生では、作文や授業の振り返りなどを書く際に、言葉ブックの用語を使って書く姿が見られた。また、言葉の意味が分からないものについては、辞書を使って調べるようにしたことで、言葉の意味を理解して活用するだけでなく、普段から積極的に使おうという意識が育った。５年生では、ディベートの学習を通して学んだ言葉や話し方のポイントを新たに追加し、いつでも振り返ることができるようにした。

【写真５　言葉ブックを活用している様子】

（３）加配教員（学習サポーターを含む）の活用

学習理解が難しい児童やつまずきが見られた児童への支援のために活用した。特に、国語科の読解問題や辞書の使い方などの個別に指導が必要な場合は、担任だけで指導するときよりも学習サポーターが入ったことで、より多くの児童が学習のめあてを達成することができた。

４　成果

全国学力・学習状況調査の結果を受けて明らかになった課題を教師間で共有したことによって、教師が意識して取り組むことが明確になった。また、６年生が受けた結果であるが、学校全体として同様の傾向が見られることが分かり、それぞれの担当する学年の児童の実態に応じて、課題解決に向けてできそうなことから少しずつ取り組むことができた。児童の学力面については、児童の強みである「話すこと・聞くこと」の力をベースに、伝え合いを通して書く力を伸ばすような手立てを講じたことで、書くことへの抵抗感を和らげることができた。さらに、伝え合いという協働的な学びを積極的に取り入れたことで、自分の考えをより深めたり広げたりすることにも繋がった。

５　今後の課題

「読むこと」にも課題があったが、読む力を伸ばすことに焦点を当てた取組が少なかった。今後は、読むことに関する内容、特に情報の扱いに関する内容や説明的文章の内容を理解するための手立てを考え、指導に当たっていく。また、国語科だけで、児童の読む力と書く力を向上させることは難しいため、カリキュラム・マネジメントをもとに教師間の協働を促し、教科等横断的に取り組むことで、スパイラル的に学びを深めていけるようにする。